（別紙２）

論文審査の結果の要旨

氏名　吉丸（よしまる）　雄哉（かつや）

本論文は、江戸後期の戯作者式亭三馬（1776 ～ 1822）の滑稽本・合巻・読本等の小説から、狂歌・狂文にいたる多様な作品を、先行作・同時代作からの影響や、素人芝居・落語・講談等の芸能からの影響に力点を置きつつ明らかにしたものである。本書の構成は、第一章「田舎芝居・素人芝居と滑稽本」が「三馬作『田舎芝居忠臣蔵』について―『田舎芝居』の系譜―」等の三節、第二章「戯作の種々相」が「浮世草子と芝居物の滑稽本」等の三節、第三章「読本の戦闘場面」が「三馬読本の戦闘場面」等の三節、第四章「狂歌・狂文」が「三馬と狂歌―『狂歌けい』を軸に―」等の二節からそれぞれ成る。

第一章は、三馬の『田舎芝居忠臣蔵』を中心に田舎芝居物・素人芝居物の滑稽本の系譜を辿り、落語や素人芝居・茶番等の芸能が滑稽本に大きな影響を与えていること、特に『田舎芝居忠臣蔵』の初編の構成が、朝寝坊夢羅久の落話から多くを得ていることを明らかにする。

第二章は、小説作品のジャンルを超えた影響関係を探るという観点から、三馬の滑稽本や合巻を特に浮世草子の八文字屋本と詳細に比較し、同じ八文字屋本の利用でも、気質物の『世間娘気質（かたぎ）』に依拠する合巻『女房気質異（おつなえんむすび）赤縄』と続編『合（あわせかがみ）鏡女風俗』が設定や文章をかなり改変しているのに対し、時代物の『丹波与作無間鐘』に依拠する合巻『忠孝振分道（ふりわけどうちゆうすごろく）中双六』ではほぼそのままの形で用いており、浮世草子の時代物と合巻の近似を明らかにしている。また、三馬の合巻には、前代の黄表紙と同様の洒落や諧謔に富む作品があり、それが滑稽本と多分に共通する性格を持つことを指摘する。

また、第三章は、読本における戦闘の場面を取り上げ、それが中国白話小説よりも、むしろ軍記や歌舞伎からの影響が強いことを、豊富な挙例により論証する。また、三馬の読本『阿古義（あこぎ）物語』の「大磯十人斬」には、歌舞伎『五大力恋（こいのふうじめ）緘』からの影響に加えて、講談・随筆との関係も想定でき、独自の戦闘場面となっていることを指摘する。

さらに第四章は、三馬の狂歌について、前期の愛好者としての活動に対し、後期は職業的な戯作者として組織的な活動を展開したことを明らかにし、また狂文については、俗語の使用の型等を検討して、戯作と共通する表現手法であることを明らかにする。また、狂歌や狂文が、戯作者にとっては滑稽本等の戯作の縮小版としての意味を持ったことを指摘する。

従来の三馬研究は、滑稽本が中心であり、合巻や読本等のそれ以外のジャンルにふれた研究においても、同一のジャンル内での他作家との比較ないし影響関係に終始していた。本論文は、三馬の作品を、狂歌・狂文まで含めてジャンル横断的に考察し、また諸芸能との関係にまで踏み込んでいるところに大きな意義がある。節により論述に精粗の差がある箇所もあるが、三馬の戯作の全体像を描こうとした意欲的な態度は高く評価できる。よって、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断する。